



その先に何を見てีますか

前住職

知らぬ間に年をとっています。年を重ねることに身体も心もかたくなり、頭も行動もスローで鈍くさい。心もかたくなになつて頑固です。おかげさまで順調に年をとっています。

年齢に関係なく、自分の考えが一番よいと思うのが人間です。自分の立場を通そうとして心を閉ざしてしまいます。

新聞の「人生相談」の欄にこんな投稿がありました。

「子ども達のために必死に生きてきました。そのため、今死んだとしても、恐怖も悔いもありません。ただ長生きしてしまつて周りに迷惑をかけていくことにも気づかなくなつていくことが怖いのです」と。

死に向かう準備として「終活」ということが流行しています。子どもに迷惑をかけたくないという親心のようですが、自分はこれまでの人生で、誰にも迷惑をかけていないという自惚れのようにも聞こえてきます。

明日どうなるか分かりませんが、「縁をいただいて生かされている尊い命です。この世には自分一人の力だけで生きている人はいません。縁あって親子となつたのです。兄弟姉妹、夫婦、知人となつたのです。これは自分の努力でこしらえた世界ではありません。お互いが支えあう関係にある事実を新聞の相談者は忘れているように思えます。自分の考え方と縁ある人の思いとは同じではありません。

自分の考え方だけが全てだと思うのがおこりの心です。私たちは世間の習慣や流行の中に沈んでいます。沈むと周りの世界が見えなくなり出口がありません。孤独にもなります。「あたりまえ」の生活は大事なことを見過してしまいかがちです。



自分の人生を考える時に二つの見方があります。生きている今から死に向かう自分という「あたりまえ」の見方です。もう一つは仏さまが教えてくださいます。この世の死を超えた生というところから今の自分を見るのです。この立場では「終活」は不要です。

親にも二種あります。この身体を生んでくれた親と、心の親がいます。心の親は阿弥陀さまです。浄土真宗ではこの仏さまを「親さま」と親しみをこめて呼んでいます。

「父母に呼ばれて 仮に客にきて 心残さず 帰るふるさと」と古人は詠んでいます。

ふるさとは、死んだり別れたりのない世界です。右往左往するだけの人生ではさみしすぎます。人間は自分の「生きざま」を残すだけです。命が終わるその先に何を見て生きているかを問うてみましょう。

「南無阿弥陀仏」とよぶ声は、親のよぶ声、子のしたう声です。親の呼び声を心に聞きながらリラックスしましょう。

## 念佛奉仕団参加二十回

渡辺 和子

長年お寺の行事・法座に出向く母をいつも何気なく見守ってきました。高齢になつた今でも毎月カレンダーに法座の日を記入し、他に予定が入らないよう気を付けて出かけていきます。時には気分や体調が少し優れない日でも、何故が聴聞から戻つた母は、不調も吹き飛んだように晴れ晴れとした顔つきでその日の出来事をいつも楽しそうに話してくれます。

信行寺さまより母の本願寺念佛奉仕団参加二十回の記念なので、一緒に参加しませんかとお声をかけていただきました。母は奉仕団に参加することを以前から楽しみにしており、コロナ禍で行けない時でも、口癖のように二十回の奉仕団が終わるまでは元気でいなけ



ればと言つっていました。だから今回は一緒に参加し、そばで見守つてみようと親子で参加させていただきました。莊厳な本願寺までの見るもの聞くもの体験するものすべてが初めてのことで少々緊張していました私に、母は生き生きとこれまでの経験と本願寺さまの説明をしてくれました。参加二十回記念の表彰にもそばで一緒に受けることができ、母の晴れやかな顔を見れた忘れられない貴重な一日間を過ごさせていただきました。

今回皆さんからお寺での話などを伺うことができ、母は本当に楽しんで信行寺さまに長年出かけていたのだと改めて感じました。これまで何かイヤなことがあつた時でも、法座や門信徒さんとの交流で癒され心の拠り所にお寺がなつていたのだとありがたく存じます。長年の良きご縁をこれからも見守つていきたいと思います。



## 「確かなもの」

### 住職

「この世の中に確かなもの、変わらずに存在し続けるものはあるのでしょうか？確かなものは何もない」と釈尊はおっしゃいます。しかし私たちはその事実を真っ直ぐに受け取ることができます。全てが変化の連続で動き続けているのが諸行無常の世の中です。年を重ねるたびに若い人もいすれ老いを感じるようになり、元気なひとも突然の病に倒れることもあります。地震など自然災害によって町や人の命が奪われることさえあります。ですから先のことは分からぬというのが真実だと言えるのですが、私たちは安心安全なものを築くために社会や町をつくり、また医療や福祉などを発展させて老いや病など人生における不安をなくそうと/or>きました。その不安が完全ではなくなることはないにしても、そのことで多くの人が助かってきました。しかし仏さまからみれば、まるで砂の上に立派な城を築いているようなものです。土台がしつかりしていないわけですから、いくら努力して作り上げたとしても崩れてしまう可能性を常にはらんでいるのが私たちの人生なのです。生老病死の苦しみから離れることができない存在である」とを釈尊は初転法輪で最初にお説きにな

りました。それを否定する人は誰もいませんが、頭で理解するのと我が身のことと引き受けるのは別問題です。

この世に生を受けたからには皆必ず死んでいかなければなりません。遠い先のことのように思っていますが「今日とも知らず、明日とも知らず」と白骨の御文章にあるのがいのちの本当の姿です。今生きていることが当たり前ではなく、釈尊が「死の縁無量なり」といわれる人生であります。ながら、無事に生きていることのほうが奇跡なのです。自分の心臓が動き、息をしていること、どれも私の努力でしている世界ではなく、いのち自然のはたらきによつて有難くも生かされているわたしたちであります。

「火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつてそら」とたわごと、まことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておはします」（歎異抄）

私たちの住む世界は火のついた家が燃え崩れ落ちていくような無常の世界で、とても安心して住める状況ではありません。真実とよべるような確かなものはなく相対的虚構の世界でしかありません。しかし、そんな世界に生きる私に如来大悲の心が絶対的真実の言葉となつて、常にはたらきつづけてくださるのが南無阿弥陀仏のお念佛なのです。常に我を照らす如来さまのお慈悲を「大悲無倦常照我」と正信偈のお言葉で味あわせていただきましょう。

## 「念佛セツション」

米田 空城



この度三年間在籍した龍谷大学大学院実践真宗学科を修了します。昨年『信行寺報恩講』の法要の後、礼拝堂で私自身の研究テーマの一つとして「念佛セツション」を開催しました。念佛セツションは、一人でも多くの方に念佛に親しみを感じていただき、お寺にお参りする機会のきっかけにねらう、また、どなたでも気軽に参加できるようにという想いから企画しました。内容は、太鼓などの民族楽器を全員で一緒に叩き、輪になつて念佛を称えます。当日は二十代から八十代の幅広い年齢層の方に参加していただきました。初めはどうしていいのかわからなかつたり、戸惑つたりする方もいましたが、最後は楽しかつたという声をたくさんいただき嬉しかつたです。普段の生活とは違つた時間、念佛と共に一緒に称えるという場を持つことで、ついつい忘れがちな「阿弥陀様の救いの中で生かされている」ありがたさを私自身が改めていただく機会となりました。

私は、今後も念佛セツションの開催を続けていきたいと思つております。少しでも多くの方に念佛の繋がりが広がつていきますように、ぜひ気軽な気持ちでお寺に足を運んでいただけますようにという想いからです。少しだけ日々の時間から離れて、様々な縁の中で生かされているのだな、と自分と向き合うきっかけとなりましたら幸いです。たくさんの方の声明が重なり、調和していく念佛セツションを聞いて、まさに私が救われていく存在であったことに気づかされ「報恩感謝の念佛」が口から溢れてくるものであります。念佛をたくさん称えたから救われていく、そのようなことではないのです。念佛セツションに参加したから、たくさん念佛を称えたから、善き事をした!というわけでもないのです。私たちは、すでに阿弥陀様に救われていく身であり、日常の生活もその救いの中にあり、悲喜交々の暮らしの中での「感謝の念佛」こそが浄土真宗の念佛です。

私は、今後も念佛セツションの開催を続けていきたいと思つております。少しでも多くの方に念佛の繋がりが広がつていきますように、ぜひ気軽な気持ちでお寺に足を運んでいただけますようにという想いからです。少しだけ日々の時間から離れて、様々な縁の中で生かされているのだな、と自分と向き合うきっかけとなりましたら幸いです。たくさんの方の声明が重なり、調和していく念佛セツション。世代を超えてつながつていきますように。

# 法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、五月の言葉の説明をします。



仏さまの光に  
照されて  
私の心に  
明りがつく

助かる」と安心することだ、と仰せを聞き受けるのが信心であります。

対談の中で、「親鸞聖人は信心を『遇う』とか『聞く』という言葉で顕されていますね。だから信心ということは、仏さまの光に照らされて、私の心に明かりがつくことだというように味わうと、一番有り難いんですよ。」と話されています。

お念佛を称える時、そこに仏の心が通い、仏の光に照らされているのです。常に浅ましい煩惱を起す自分を恥ずかしく反省せしめられます。こういう自分のためにはたらいでくださる「恩をよろこび生きていくことが大切です。

仏さまの光は、いかなるさやかな生活の中にも一人ひとりの中に生きているのであり、光つてているのです。

今月の言葉は、「浄土真宗を語る」に掲載されている対談中の山本仏骨（やまもとぶつこつ）和上の言葉です。

行信教授、本願寺派勸学、龍谷大学教授、本願寺派伝道院院長を歴任され、大阪東淀川区にある専坊住職を務められました。毎年信行寺でも「法話して下さいました。

浄土真宗の信心は、「安心せよ必ず助ける」という仮の仰せだから、それをいただく信心は「きっと



# 日頃の疑問を考えよう

Q

古い写真がたくさんあるのですが、私が亡くなったら子ども達もどうすべきか困ると思います。だから処分しておきたいのですが、ゴミとして捨てるのは忍びないのです。どうするのがよいでしょうか？

A

そうですね。確かに思い入れのあるものを燃えるゴミと一緒に捨てるのは、なんだかよくない気がしてしまいますね。生前に棺桶に一緒に入れてほしいと子どもに伝えておくのはどうでしょうか。後に残すと迷惑がかかると親は思つてしまいますが、誰もがお世話になることです。後の者に任せると、伝えていくことも必要でしょう。

また、仏教ではお焼き上げ、故人の思い出の品を焚き上げることで故人に返す儀式があります。火で燃やすのも一つの方法でしょうか。お寺でも満中陰の法要が終えた後、白木の位牌は引き取つてお焼き上げしています。

仏壇・仏具・写真など使わなくなつたものをどう処分すればよいかと相談されることもあります。タンスなどと同じように考えれば粗大ゴミとなるわ

けですが、やはり、閉眼法要（性根抜き）を行い仏具屋さんなどに引き取つてもらうのがよいでしょう。

これはどうすべきというよりは、人間の心の問題ともいえるかもしれません。仏事に関して、教えより形式が伝わった現状があるようにも思います。例えば、葬儀会館に行くと清め塩が置いてあります。どんな意味があるて、どのような心で使うのでしょうか。清め塩は、仏教とは関係ないことです。これは死をケガれと見なし、死者のタタリを恐れる考え方由来するようですが、そのように考えること自体故人に対して失礼であるといえます。また、中陰が三ヶ月にまたがるとよくないという人もいます。三ヶ月を身つき、四十九日を始終苦と語呂合わせ、始終にわたつて苦しみが、死を穢れと考え、身につくと考えるのです。

当然意味があつて伝わつていることも多いわけですが、そこにどのような教えが、心があつて伝わつてているのかを理解して行つことが大切です。



# 信行寺行事予定とご案内



## 春の彼岸法要

三月二十三日（土） 住職

二十四日（日） 前住職

両日とも午後二時～三時半ごろ

## 第二十一回 門信徒会総会

四月二十七日（土）午後二時より

おつとめ・総会・法話

## 花まつり

四月四日（木）

読み聞かせや住職のお話、いたやど保育園園児さんの歌などを予定しています。

詳しくはお寺まで問い合わせください。

編集委員より

令和六年（二〇二四年）元旦、思いもよらない北陸地方大地震が起きました。驚きで心が締め付けられました。私達は、ふと阪神淡路大震災を思い起こしたのではないかでしょうか。大変な思いをされている方々、負けない心で頑張っていただきたいです。

今回初法座には久しぶりに参加させていただきました。ご住職の法話の後、尺八の演奏を聴かせていただき、ピアノと馬頭琴の演奏で皆様と一緒に歌を歌いました。

日々、何事もなく過ごさせていただいていることに感謝し、有り難く感じています。楽しい一日を過ごさせていたしました。

南無阿弥陀仏

新田 光美

